

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730732

研究課題名(和文) 高等学校の総合的な学習におけるキャリア教育の評価モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of evaluation model of career education in the period of Integrated Studies of high school

研究代表者

安達 仁美 (ADACHI, Hitomi)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：30506712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高校において総合的な学習を経験した人物の高校卒業後のキャリア形成過程を質的に描き出し、総合的な学習とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、共有可能なキャリア教育の評価モデルを提案することであった。  
その結果、総合的な学習の時間のキャリア教育としての成果は、即効的にはかかれるものに限らず、文化社会的な影響を受けて熟成されていくものであることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the career formation process after the high school graduation of the person who experienced the Integrated Studies in high school. Then, through analyzing the relevant elements of experienced the Integrated Studies and career development, it was to propose an evaluation model of shareable career education.

As a result, efforts of carrier education in the Integrated Studies is not limited to those tomb in immediate manner, it became clear that those will aged undergoing cultural social impacts.

研究分野：教育方法学

キーワード：縦断調査 キャリア形成 総合的な学習の時間

## 1. 研究開始当初の背景

キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要となる基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されており、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの基礎的・汎用的能力を育成することが必要とされている。その一つの方策として総合的な学習の時間を有効に活用したキャリア教育の在り方が求められている。

しかし、総合的な学習におけるキャリア教育の推進が期待される中、高校の総合的な学習に関しては、その実施状況に関する問題点が指摘されており、主に以下の3点に整理できる。

要因1：教師の教科専門性が高く、教科・科目別の学習活動が主であるため、教科横断的な活動が行われにくい傾向にあるなど、教師の資質の問題。

要因2：インターンシップなどの体験的な学習は行われているものの、事前学習による活動への動機づけや、事後学習によるまとめの学習が希薄なままに、単発的に行われる傾向にあること。

要因3：総合的な学習の時間が、授業の補習や進路指導に当てられるなど、「生き方指導」ではなく、大学の入り口のみを意識した「受験指導」に当てられる傾向にあること。

先述した3点の要因の中で要因1は、学校経営や教員養成に深く関与するため、早急な解決が難しい問題である。しかし要因2に関しては、他校でも共有可能な実践モデルを提案することによって、その要因を取り除くことに寄与できると想起し課題追究学習を主軸とした総合的な学習の意義を明らかにし、理論的な考察を加えることによって、共有可能な高校の総合的な学習の実践モデルを構築することを試みてきた。

しかし、共有可能な実践モデルを構築する

にあたり、基礎となるキャリア教育の評価に関する研究が遅れていることが明らかとなった。中でも要因3の「受験指導」の意識が根強く浸透していることで、社会的・職業的自立を目的としたキャリア教育の評価が、希望大学への進学率等の一過的な出口調査に終始している現状があった。また、職場体験学習やインターンシップの意義を明らかにした研究は多数報告されているが、高校での学びと卒業後のキャリア形成の関連を長期的に追跡した上で、キャリア教育の評価モデルと提案した調査は行われていない。

2002年度より研究代表者は、A高校をフィールドとして、特定のテーマについて追究する「課題追究学習」を中核に据えた総合的な学習の時間に着目して研究を進めてきている。現在までに課題追究学習を通して、追究課題を決定する過程で、問題意識が深化すること、青年期の発達課題に対して、課題追究学習が有効に機能すること、課題追究学習を通して自己と社会との繋がりを強く認識できるようになることなど、課題追究学習に内在するキャリア教育としての意義を明らかになり、さらに、校外でのフィールドワークで出会う他者がキャリア意識に及ぼす影響が大きいことが明らかとなった。

これらの背景を受けて、本研究ではA高校をケースとし、これまでの研究成果を踏まえた上で、総合的な学習を経験した人物の高校卒業後のキャリア形成過程を追跡調査し、総合的な学習とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、共有可能なキャリア教育の評価モデルを提案する発想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高校において総合的な学習を経験した人物の高校卒業後のキャリア形成過程を質的に描き出し、総合的な学習とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、共有可能なキャリア教育の評価モデル

ルを提案することである。

そこで、本研究では具体的に次の3点を研究課題として設定した。

(1) 高校1年生から卒業後8年間のキャリア形成と総合的な学習との関連要素について描きだす質的分析手法を検討する。

(2) (1) で検討した手法を用いて、キャリア形成と総合的な学習との関連構造を描く。

(3) 中等教育全体の課題や青年期の課題などの実態把握をした上でキャリア教育の評価モデルを検討する。

### 3. 研究の方法

人間の経験を、時間的文脈と文化・社会的文脈との関係の中で捉え記述する質的分析方法について整理した上で、TEM

(Trajectory Equifinality Model: 複線経路・等至性モデル)(サトウ、2006)の適用可能性について検討した。

2002年度より継続的に追跡をしているA高校を卒業した5名の人物に対し、ライフヒストリー調査の手法を用いたインタビューを行った。この5名に関しては、高校1年生から高校3年生までの総合的な学習で取り組んだワークシートなどの学習記録と、高校1年~3年、大学4年(1名は3年)に実施した当時のキャリア意識を語ったインタビューデータがある。これらのデータを有効に活用し、総合的な学習での学びとキャリア形成の様相を描きだした。

### 4. 研究成果

#### (1) TEMによる分析の試み

就職3年目をむかえた抽出生徒のMに注目し、そのキャリア意識の変容過程TEMを用いて可視化し分析することを試みた。

その結果、キャリア形成に影響を与える要因がTEMの概念であるSD(社会的方向付け)やSG(社会的ガイダンス)によって描き出すことができた(表1)。

表1. 抽出生徒MのSDとSG

社会的方向付け (Social Direction:SD)	①小学校の教員採用試験の内容への苦手意識 ②教師という職業への母親からの強いですめ ③次々に内定をもらう周りの文系の友人 ④リーマンショックが起きる(2008年9月) ⑤リーマンショック以降伸び悩んでいる会社 ⑥東日本大震災による節電対策で仕事縮小 ⑦同じ下請けの同業社との仕事分配の変化 ⑧保守的で投資をしない経営者一族 ⑨結婚をして身動きが取れなくなった先輩
社会的ガイダンス (Social Guidance:SG)	①小学校の教師をしている両親のすすめ ②先入観で決めつける両親を越えたいという思い ③小学校の恩師から聞いた教師の仕事の大変さ ④世の中に形に残るものを作りたいという思い ⑤FMラジオで宣伝している電気系が強いA大 ⑥定年まで働きたいという思い ⑦愛知県にあり2007年にブランド企業化したA社 ⑧個人で仕事を管理できる“ゆるい”会社の体質 ⑨個人で会社を興した先輩の存在 ⑩募集要項をみて“自分の武器”について考える

また、TEMによって10年間の語りの厚みを可視化できない点や、同一人物が異なる時期に語った前向型の語りと回顧型の語りとの融合可能を検討することなどの課題が浮かび上がってきた。

#### (2) 時間が関わる質的分析手法の課題

森(2012)は、発達研究としての回顧型研究の問題点として、採取するデータが、過去の出来事が終着点への到達を必然とみなす物語として再構成される点を上げ、物語と発達の混同は回避されるべきであると指摘している。その一方で、前向型研究は、終着点を想定しない(できない)事態でのデータ採取であるため、物語化を回避できる点で発達研究には適していると指摘している。

森によって大別された2つの型に当てはめると、本研究の中で採取したデータは、その時点においては回顧型であり、また対象者の時間の進行に寄り添いながらデータを収集した点から捉えると前向型のデータ採取といえよう。非可逆的な時間軸の流れの中に、それを置こうとすると。例えば、図1の時点Aで語った未来の語りaは、時点B以降ではその一部が過去となる。同様に時点Bでの語りbは、時点C以降は過去となるのである。さらに、回顧的な語りの内容は時間が進むにつれて含まれる出来事も増えていき、そして、その度に、再解釈され、再定義され、意味づけが変容し、永遠に形が定まることがない。その質を非可逆的な時間

の中でどう捉えていけばいいのか。また、さらに立ち止まるのは、分析をする「私」の質の変化である。大倉（2011）は、間主観性や相互主体性といった概念を導入しながら関係発達論を述べている。時点Aの「私」は、過去の物語の中にいる「私」なのである。時点Aに採取したデータを、学部研究生だった「私」が分析をするのと、現在の「私」が分析するのでは、そこに浮かび上がってくる事柄も違うのではないだろうか。

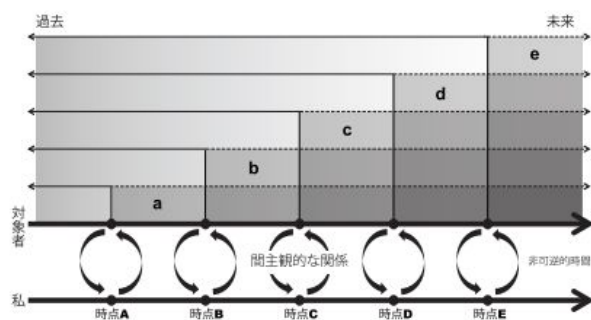


図1．時の流れの語りの質の変容

### (3) 総合的な学習に対する評価の語り直し

(1) (2)を踏まえ、同一人物の総合的な学習に対する語りの質の変容に着目した。

まず、高校一年生、高校三年生、大学一年生、大学四年生のトランスクリプトをカテゴリー分けし、総合的な学習に関する価値づけがみられる語りを抽出した。学習者として語っている“この時”の語りと、既習者として振り返っている“あの時”の語りに分けて内容にコードを伏し、意味づけの変容について分析をした。

その結果、卒業後に他者の指摘を受けて自己認識される総合的な学習の価値があることや、大学のゼミや就職活動や社会人としての生活を送る中で、高校生の際には言語化されなかった総合的な学習の意味が意識化されること、総合的な学習の時間のキャリア教育としての成果は、即効的にはかられるものに限らず、文化社会的な影響を受けて熟成されていくことが明らかとなった。

### (4) まとめ

本研究の目的は、高校において総合的な学習を経験した人物の高校卒業後のキャリア形成過程を質的に描き出し、総合的な学習とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、共有可能なキャリア教育の評価モデルを提案することであった。

キャリア形成には時間的文脈と文化・社会的な文脈が関与するためTEMを用いた結果、TEMの概念によってキャリア形成に影響を与えた関連要素を描き出すことができた。また、前向型の語りと回顧型の語りを非可逆的な時間の中に置かず、質の変容に着目して分析をした結果、総合的な学習の時間のキャリア教育としての成果は、即効的にはかられるものに限らず、文化社会的な影響を受けて熟成されていくことが明らかとなった。

本研究ではキャリア形成の変容を時間と文化・社会的な文脈を捉えて描き出すことに重点を置いたため、評価モデルを提示するまでには至らなかったが、キャリア教育の評価は、即効的な評価ではかられるものではなく、長期的な時間と共に熟成されていくことを見通した指標を用いる必要性について示唆することができた。

#### <引用文献>

- ・大倉得史、育てる者への発達心理学—関係発達論入門、ナカニシヤ出版、2011。
- ・サトウタツヤ、発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての復線径路等至性モデル、立命館人間科学研究、No.12、2006、pp.65-75。
- ・森直久、発達研究の枠組みとしてTEM、安田裕子、サトウタツヤ(編)、TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開—、誠信書房、2012、pp.165-171。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

安達仁美

時間と共に変容する質の捉え、質的心理学  
フォーラム、査読有、15巻、2013、pp.77-78。

[学会発表](計4件)

安達仁美

総合的な学習に対する意味づけの変容過程—この時とあの時—、日本質的心理学会  
第12回大会、2015年10月、宮城教育大学

安達仁美

10年間の縦断調査から記述するキャリア  
意識変容、日本キャリア教育学会第35回  
研究大会、2013年10月、名古屋大学

安達仁美

青年期におけるキャリア意識の変容要因  
の検討:—高校1年・高校3年・大学4年・  
就職3年目の語りを比較して—、日本質的  
心理学会第9回大会、2012年9月、東京  
都市大学

安達仁美

就職3年目をむかえた社会人のキャリア意  
識の変容過程—複線径路・等至性モデル(T  
E M)による分析の試み—、中部教育学会  
第61回大会、2012年6月、信州大学

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

安達 仁美 (ADACHI, Hitomi)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号: 30506712